

愚者の舞、狂者の舞

塚本三郎

一体いつまで、こんな泥仕合を続けるのか。国会の空白は、単に税金の無駄使いだけではない。国民の困苦はもとより、国際的信用の失墜は計り知れない。なにも仕事をしていないだけではなく、国家を地獄に落とし入れつつあることに気が付いていないのか。

「泥棒にも三分の理」と昔から言われる。まして論戦の結果当選した国会議員に、理屈のなかるうはずはない。だからといって、同じことを繰り返すのは、国家と国民を無視した態度であり、選んだ国民も、今の国会の有様にあきれ返っている。

ものごとには表と裏がある。良いことも裏を返せば、即、悪い事とも言いうる。政治はまつりごとである。政治家は、神や仏に仕えるつもりで事に当たるべきであり、裏を論ずるよりも、良きに悟って前向きに対処するのが政治である。

去る参議院選挙で、民主党中心の野党が勝利を得たことは、国民の良識の勝利であり、日本の国会にとって、祝福すべき結果と受け止めるべきではないか。

その前の衆議院選挙での、小泉元首相の素晴らしい勝利の成果と共に、少々やり過ぎた手法に対する、国民の自民党に向かつての、自戒を求める声でもあった。これを例えれば、参議院選挙で「お灸をすえた」とも評する。これで自民党もやり過ぎを反省し、勝利した民主党も責任野党として、自覚ある政党に成長してくれることを国民は期待した。

福田首相率いる自民党も、小沢一郎率いる民主党も、大連立を思っていたら、いつとき、両氏は日本政治にとって、新しい第一歩を踏み出したと感じ、拍手をもって迎えたのは私だけではなかったはずだ。しかし結果は異なり、国民は大きく失望した。

なぜか、日本の民主政治の進展を悦ばない一部のマスコミは、「この連立構想に冷笑を浴びせた。そして民主党の一部野心家議員は、「政権は奪い取るもの」と、無責任な左翼的扇動に踊らされ、小沢一郎の足下を脅かした。小沢一郎がこの時の信念を貫き通せば、日本の国会は、今日とは全く異なった進展をみせたと思う。

参議院選挙での、民主党の勝利の民意を活かし損なつた野党。その結果、衆議院と参議院のネジレ現象を迎えた。かくて、与党も、野党も、政治活動の常道を踏み外した。

民主党が、わが党の主張を受け容れなければ、国会審議にも党の責任者との間の話し合いにも応じないと言うのは、「法の不備」を逆手にとつたやり方である。

重要な人事案件までストップさせる事態は、今日までの政局では想定外であった。その点、福田首相は飽くまでも謙虚に、相手に対して下手に出て来たことは評価したい。

私達の主張に一〇〇%従うまでは、中途半端な話し合いをしない、そして一刻も早く衆議院を解散して国民に信を問え、国民の信任は参議院に示されている。——これが民主党の立場となり、法の不備を一々逆手にとって、政府の提案と要請に動じない。

自民党は応えるすべがなく、身動きが出来ず、ただ時の経過と共に、野党に対して国民の非難の高まりを期待しているのみにみえる。福田首相はいつまで待っているのか。

政権に恋々と執着する福田首相、衆議院を一刻も早く解散して国民に信を問えと言う民主党と野党——かくて国家と国民を無視してのニラミアイとなる。

解散を避けるな

自民党は、ある一時期を除いて、戦後から一貫して今日まで政権を担い、今日の日本の繁栄を切り拓いて来た。しかし、今やその自負心を喪失して、情けない姿で見苦

しい。「私達は天下を背負って居る」。その自負心をもって、潔く衆議院を解散すべきだ。有利、不利は国民に任せ、天に委ねよ。

かつて、参議員の反対で郵政民営化法案が不成立となり、その結果、国民に信を問うと賛成した衆議院を解散したのが小泉元首相だった。

今度は同じ姿で、自民党が、民主党主導で衆議院解散の止む無きに至りつつある。さきの衆議院選挙は、小泉元首相の参議院への仕返しの対応とみてよい。それでも、解散の権利は首相の手の中に在る。今度もまた、参議院からの仕返しとして、衆議院を解散せよと迫られている。今回は野党の皮肉な裏返し的主張であり、因果は巡るとみた。解散権は福田首相の手の中に在る。もうこれ以上事態の引き伸ばしは許されない。仕掛けている相手が、たとえ「ゴネ得だ」としても、国運を担う天下の権は、首相の手の中に在る。ならば党の利と不利を省みることなく、腹を決める潮時とみる。

国政の停滞の原因が野党にあったとしても、政権を担当する政府に全責任が在る。さればこそ、首相に衆議院の解散権があるのではないか。福田首相の手か、それとも次の首相の手による解散か、その時期はいつなのか、各政党は注目している。

ここで私は、客観的に衆議院選挙の勝敗の結果を想定してみる。自民党が過半数を得て勝利をすれば、いかに参議院で第一党を保持している民主党といえども、今迄のような「ゴネ得」は出来なくなる。まず、国民が許さなくなる。「直近の選挙での国民の意思だ」との民主党の主張が通用しなくなるからだ。そして、野党は与党との話し合いに応じざるを得なくなる。それが国民の意思だと、素直に従わざるを得ない。

民主党は「時に利あり」と、ひたすら自民政権に、衆議院の解散を迫っている。民主党中心の野党が勝利を得れば、参議院の優位と共に、日本の国会で、はじめてのネジレ現象は解消される。日本の議会政治にとって素晴らしい成果と悦びたい。

民主党は官僚政治の打破を叫び、地方分権を語り、格差の是正、金権政治からの決別と、今日□自民政権が為し得なかった各種の政治課題を解決してみせる、と公約している。戦後六十年間の大部分は、自民党内の政権のトライ回しと評される如く、真の政権交代は無かった、と言っている。ここにはじめて自民党と肩を並べる二大政党制が実現したことになる。日本における政党政治の未熟は、政権交代が無かったことに起因している。

二大政党となるために

民主党政権が出現すれば、万々歳と手放しで単純に、論じているのではない。天下の権を預かれば、国家と国民に対する、責任を負うべきは言うまでもない。

政権の担当者直言をしなければならぬことは、「政争は水際まで」、外交と防衛は、与野党の立場を越えて、徹底的に話し合い、協力し合うべきである。国論が二分した結果、国家の分裂は、直ちに対外的に敗北を招く。野党であった民主党は、外交防衛こそ与野党が協力すべきなのに、今までは逆にこれらの案件に反対し、政府の足下を脅かして来た。ゆえに国民は、心ならずも野党に政権を渡すことを拒んで投票して来たと思う。

今一点は、小沢代表の国連中心の外交についての認識である。

国連外交を否定するのではない。しかし、日本は民主主義の政治体制を基本としている。残念なことは、近年、国連の中心的存在の米国が、徐々に弱体化しつつあり、逆に共産主義と、全体主義に身を包んだ国家、即ち、ロシアと中国が勢力を拡大しつつある。

この二カ国が極めて危険な覇権主義を、露骨に出して来ていることである。特に中国の

軍事力の増大と覇権主義は、その鉾先を日本と太平洋に向けている。

民主党が政権を担当して、国家意識に目覚めたとしても、今迄の様な、媚中派の如き外交を改めることが出来るだろうか。強大な軍事国家のロシアと中国に、日本は恐れず臆せず、是々、非々の外交を堂々と展開すべきである。

そして国連警察軍の創設を考えるのは、今日の段階ではマンガでしかない。なぜなら国連に対し、敵視政策を取って来ている国と、仲良く国連軍を造れとの発想だからである。

民主党が政権を担当し、公約通りに国政を進めれば、日本の議会政治にとつて万々歳であり、前の二項目を注意してくれば、政権交代の素晴らしさを国民は実感する。

民主党を含む野党は、私の判断であるが、大きな違いの思想を持った人達の集団である。だから政権党となれば、一つ一つの法律に対し責任を負わねばならない。

今迄のように、良い処喰いの発言のみでは事は治まらない。大方の見るところ、政権を担当しても、一年以内には、分裂の危機を迎えるとみるのは、失礼であろうか。

政権担当の責を感じて、前に述べた如く成れば良い。だが、やがて党内の対立は、権力あるがゆえに、無責任になり得ず、分裂を余儀なくされるであろう。

さすれば衆議院のみならず、支援団体の協力と支援をより多く受けて当選している参議院こそが分裂となろう。その結果、民主党の参議院優位が、分散解散させられ、やがて、これが政界再編の大きな突破口となる。

北京オリンピックは聖なる行事か

中国政府は、「オリンピックを政治利用してはならない」と世界に訴えかけながら、その実、自分達が一番多く政治利用をしている。胡锦涛中国主席は「北京オリンピックは、聖火の到来とともに始まる、必ずや聖火を成功裡にお迎えし、中華民族百年の思いを晴らすのだ」と宣言した。つまり、中国の混乱の百年を経て、ついにオリンピックを開いて、世界の大国に肩を並べると宣言したのだ。

八月八日の開会を控えて、聖火は世界を駆け巡っているが、五輪責任者の、必死の努力と、走者の聖火を守るその国の治安当事者の懸命の努力も空しく、世界中で、妨害と迷路の聖火ランナーと化している。

原因の発端は、チベットを侵略し、民族の文化を圧殺して、チベット族の蜂起を招いたことである。無抵抗の僧侶の静かなデモ、即ち「信仰の自由と平和を求め」叫びに対して、暴力と武力で鎮圧したことが発端で、チベット族の蜂起となり、ひとり、中国の自治区のみならず、世界に亡命した民族の各国に於ける抗議行動となった。

思えば十九年前、チベットを武力で圧殺して功績を挙げたと、鄧小平主席から認められて、今日の最高の地位に就いた、若き日の胡锦涛こそ「火種を蒔いた張本人」である。

オリンピックを最も政治利用している中国の責任者が、世界に向かって、聖なる行事を政治利用すべきではないと弁明するのは、まず自分に向かっての言葉ではないか。

チベットを血祭りにあげて功名を立てた胡锦涛が、一世一代の榮譽をかけた聖典を、再び武力でもって宗教者達を血祭りに上げて、何の聖典なのか。胡氏自身が世界中から非難の嵐の中での祭典となりつつある。狂者の舞だ。更に邪の権力亡者は北京のみではない、そっくり、日本にも居るではないか。ダライ・ラマ十四世の叫びに応える第一の責任は、同じ仏教徒の国日本である。日本政府も中国に抗議せよ、時は今である。

それを言わないで日本は、愚者の舞をいつまで演じていくのか。平成二十年四月下旬